

全国科学博物館協議会令和7年度海外先進施設調査報告

イギリスおよびフランスの博物館等における、常設展示のインクルーシブ・デザインの取り組みについて

《所属館園名》独立行政法人国立科学博物館 《氏名》長澤 牧子

1. 研修期間 令和7年7月26日（土）～令和7年8月2日（土）

2. 研修施設 フランス国立自然史博物館、シテ科学産業博物館、ロンドン自然史博物館、大英博物館

3. 具体的な実施内容

【1】調査の目的・対象・内容

2022年ICOMプラハ大会において、博物館は「誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む」場所であると新たに定義された。国立科学博物館では、これまで通路幅確保・昇降機設置、さわれる展示や点字ブロックの設置など、さまざまな来館者が利用しやすい展示・展示室作りを心掛けてきたが、今一度「ユニバーサル・デザイン」や「インクルーシブ・デザイン」の視点を展示及び展示室に盛り込む必要がある。

イギリス(ロンドン)、フランス(パリ)の各博物館については、比較的コンパクトな空間に、実物資料を工夫展示している施設が多く、規模としても参考になるものが多いと思われたため、以下の博物館を中心に、具体的な手法の実地調査・分析、インタビューを行った。なお、各館の業務の都合などから、インタビューについては、フランスのシテ科学産業博物館の職員へ実施したため、おもにこの博物館のインクルーシブの取り組みについて、取り上げる。また、他の博物館については、博物館の来館者の動き・様子を見てまわり、調査・分析することとした。

【調査対象】

フランス:国立自然史博物館(進化大陳列館、比較解剖学・古生物学陳列館、人類博物館)

フランス:シテ科学産業博物館

イギリス:ロンドン自然史博物館

イギリス:大英博物館

その他:近隣博物館の取り組み

【調査項目】

展示室のアクセシビリティ

インクルーシブ・デザイン、ユニバーサル・デザインの手法

センサリーマップ、カームダウンスペース、その他の工夫

多言語、各年代別の対応、館内ガイドの種別

上記に関する科学系博物館ならではの工夫

上記に関する実際の運用方法(維持費、館内職員の運営体制方法)

参考：ICOM日本委員会による日本語確定訳文

“博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、楽しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。”（出典：ICOM日本委員会 <https://icomjapan.org/journal/2023/01/16/p-3188/>）

【2】事例1:シテ科学産業博物館(フランス)における取組について

シテ科学産業博物館(Cité des Sciences et de l'Industrie)は、1986年に開館したパリの北部である19区のラ・ヴィレット公園内に位置し、パリの中心部より地下鉄で20分程度である。建物は、地上3階(フロア0、1、2)、地下2階(フロアー1、-2)の5層であり、屋外には、大型シアターのラ・ジオード(Géode)や潜水艦のアルゴノート(the Argonaute)が展示されている。

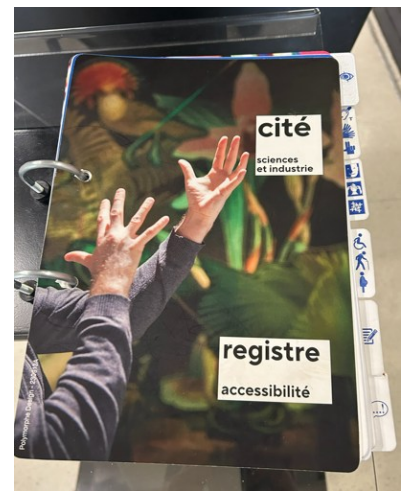
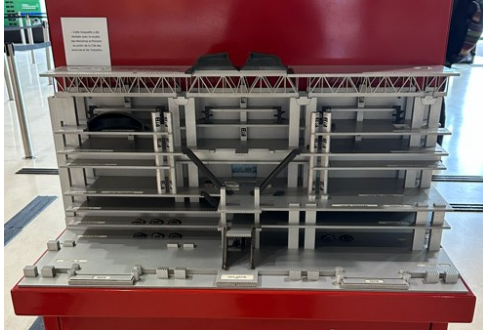
(1)入館しやすさ ―最初のアクセスとして

地下鉄の駅を降りてから、入館するまで、また館内の導線上に、様々な来館者を想定した導線の工夫が施されていることがわかる。入館する前に、先に目に入るのが、公園全体像と博物館の位置がわかる地図である。地図と文字を立体的にし、点字も添えている。地図の高さも子どもや車いすユーザーの方が見やすい位置・角度になっている。バリアフリーの観点で便利であることはもちろんのこと、実際に子どもたちが触りながら、博物館の位置や形について会話を楽しんでおり、博物館への入館する前の期待感をあげているように見受けられた。



(左)シテ科学産業博物館の入口、(右)屋外にある現在地マップ

入館後、館内にも来館者の導線上に、同様の館内マップおよび展示室の模型が配置されており、設置場所も来館者の導線・視点が考慮されていることがわかる。また、入口近くには、「Register accessibilité」という小冊子が置かれている。Register(レジストル)とは、台帳、記録簿という意味であり、博物館を利用するにあたり様々なハンディキャップ(目、耳、車いす、感覚等)別に、対応をとりまとめた冊子である。これについては、WEB上でも公開しているため、事前に情報を入手することも可能であるとともに、館内マップ・館内サイン・HP上の案内として使用しているマーク・アイコンは共通にすることで、来館者にとって、視覚的にわかりやすい工夫がされており、来館者が事前に調べる段階、実際にきた段階で迷いがなく、目的の展示室に向かうことができる。



(左)館内にある展示室の模型、(中央)Register accessibilitéの設置、(右)Register accessibilitéの表紙

出典: Register accessibilité (https://www.cite-sciences.fr/fileadmin/fileadmin_CSI/fichiers/ma-cite-accessible/_documents/Documents_a_consulter/REGISTRE-UNIVERSCIENCE-accessible.pdf)

来館者が何を調べて、どうやって博物館まで到達するのかという道のりを来館者ごとにあわせて考えており、入館前の時点からインクルーシブ対応を行っていることがわかる。まさに、アクセシビリティとは、すべての人がまず博物館にどうやって到達するか、という観点から考える必要がある。

(2) 館内の補助ツール・設備

館内には、来館者を補助する様々なツール、設備が備えられており、次の3つを例示する。

① 多目的ストローラー

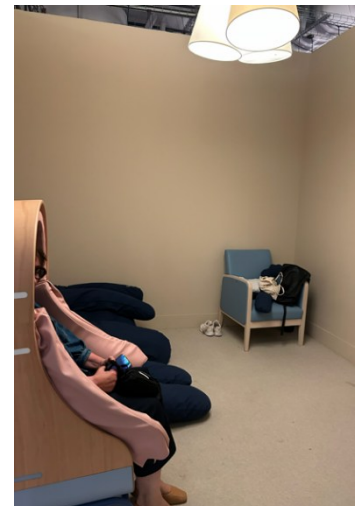
常設展示室の共有スペースに、ベビーカー置き場が設けられており、そこに館で用意している多目的ストローラーが備えられている。これは、通常のベビーカーのみ、車いすのみという利用方法ではなく、複数の使用方法ができるよう、設計されている。(使用例: 子ども2人乗り、手押し車など)

② 折り畳みいす

共有スペースや、展示室内に、備え付けのいす以外に、多数折り畳みいすが設置してある。これらは、すべて同じ仕様であり、来館者が自ら椅子をもって移動することができ、任意の場所で休憩したり、展示を見学したりすることができる。この折り畳みいすは、イギリス・フランスのあらゆる博物館での利用が見られた。

③ カームダウンスペース

一般的に、感情や緊張が高まった時に、それを緩和させる目的で作られたスペースであり、近年あらゆる施設で導入が進んでいる。ここでは、children's Exhibitions (子ども用展示) の5-10歳を対象にした展示室内にあるカームダウンスペースを見学した。他の部屋よりも、柔らかい照明、ソファー、閉じられた空間が用意されており、リラックスできるようになっている。



(左)多目的ストローラー、(中央)折り畳みいす、(右)カームダウンスペース

常に多くの人が利用するとは限らないが、いつでも利用できる環境を整えておくこと、また特定の人のためのものを作るのではなく、あらゆるユーザーが具体的にどんな利用をするのか、利用方法を考えて、あらゆるツールや設備を検討していることがうかがえる。また、設備という点においては、今回訪れたイギリス・フランスの多くの博物館にて、キャッシュレスおよびWEBサイトからの事前予約のみの対応である博物館も多い中、シテ科学産業博物館の窓口には、常にスタッフが複数名常駐しており、当日窓口で現金やクレジットカードで購入ができる手段が残されていることも、さまざまな来館者層への配慮が見られた。

(3)展示室・展示物の工夫

展示室そのものについても、すべての来館者が観覧できるように工夫されている。

①什器の工夫

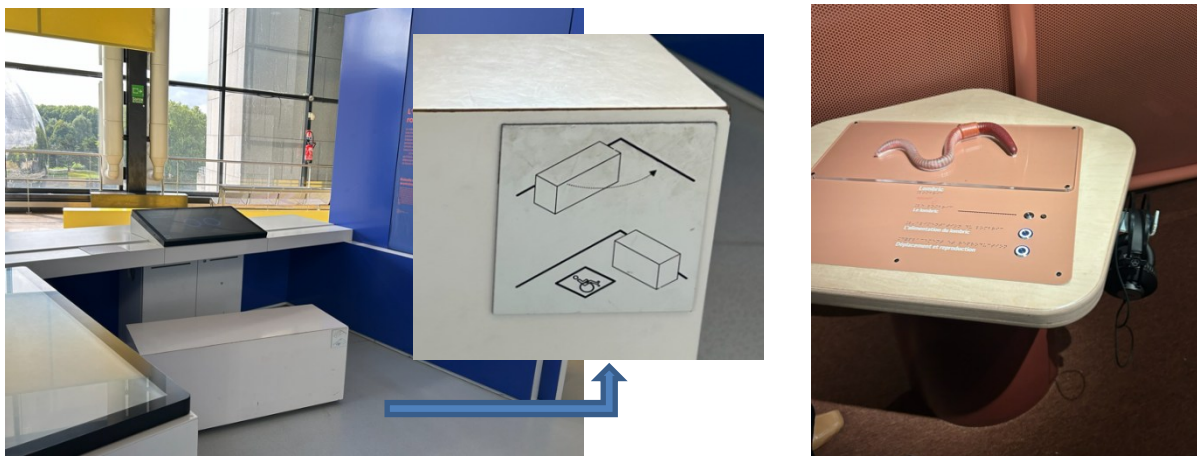
例えば、展示台の高さは、大人、子ども、車いすのユーザーが使用しやすい高さに設定しており、なおかつ、ユーザーによって、什器の一部を動かすことができるような場所もある。また、それらは、館内スタッフだけでなく、利用者自身が、使用方法がわかるように、什器そのものにシンプルに図示している。

②展示物のバリアフリー

一つの展示物について、ハンズオン・音声ガイド・点字表記の組み合わせで展示していることが多い。それにより、共通の展示について、来館者が自分にあった楽しみ方ができる。展示物を見る導線についても考慮されており、十分なスペースを設けたり、視覚障がい者用の誘導線を盛り込んだりしている。

③多言語・年齢層別の対応

多言語は、母語であるフランス語のほか、英語およびスペイン語の3か国語表記である。英語以外の言語について、国内の取り決めは特にないとのことだが、より多くの人が使用するであろう言語としてスペイン語を選択したとのことであった。また、年齢層別の対応としては、すべての人を対象とした常設展示のほか、子ども向けの展示を用意している。乳幼児向け、2-7歳向け、5-10歳向けの展示を用意しており、館内マップに色わけをして案内している。なお、企画展やその他の展示で、子ども向けの展示がある場合も、対象年齢を明示して、利用しやすい仕組みを作っている。



(左)移動できる什器の例、(右)ハンズオン、音声ガイド、点字対応ありの展示物



(左)3か国言語のパネルと視覚障がい者用の誘導線がある展示室、(右)3か国言語対応の企画展示室

(4) インクルーシブ計画について

上記のとおり、館内の展示室、展示物を観察しながら、同館のインクルーシブ対応のスペシャリストである Sabine Tuyaret氏にお話を伺ったところ、これらの取り組みは、すでに10年前には少しずつ行われており、一つの展示を作るために、構想をふくめ、約2年の期間を要する。インクルーシブ対応のためのチームを編成し、そのチームは10人程度で構成されている。

また、常に新しい展示を作る際にも、インクルーシブの観点は考え続けられており、既存の展示でも、新しい展示でも、インクルーシブの要素が常に取り入れられながら展示が作られている。

展示を作る際に、大切にしている観点については、「together(一緒に)」ということである。利用者層(ターゲット層)は意識するものの、特定の人にとって使いやすいものを作るのではなく、あらゆる人が一緒に、同時に使用できることが重要な観点であるということをインタビューの中で教えていただいた。

【3】事例2:大英博物館(イギリス)のセンサリーマップについて

次に、現地調査として、大英博物館でのセンサリーマップに従って見学するという実地調査を行った。センサリーマップとは、感覚過敏な方々が快適に過ごせる場所を見つけるための、光や音、匂いなどの感覚情報を示した地図のことであり、日本国内の博物館や、大阪万博でも導入されている事例がある。

大英博物館では、WEBページでセンサリーマップを公開しており、通常フロアマップと比較するかたちで、感覚情報を示したものを掲載しているため、利用者にとって、位置を把握しやすい。

参考:大英博物館センサリーマップ(出典:大英博物館WEBサイト)

https://www.britishmuseum.org/sites/default/files/2023-11/British-Museum-Sensory-Map_2023.pdf

大英博物館のセンサリーマップにおいて取り扱われているのは、以下の6つである。(※日本語訳については、筆者の参考訳として記載する。)

- | | |
|--------------------|-------------------|
| ① Noisy spaces | にぎやかな場所 (音が大きい場所) |
| ② Quieter spaces | 静かな場所 (音が小さい場所) |
| ③ Crowded spaces | 混雑している場所 |
| ④ Strong smells | においが強い場所 |
| ⑤ Natural light | 自然な光の場所 |
| ⑥ Lower or subdued | 低め・控えめな照明の場所 |

実際に、センサリーマップの表示をもとに歩いてみると、「混雑」、「においが強い」、「にぎやかである」といったマークがセットで表示されているところが何か所かある印象を受ける。それらは、カフェや食堂であることが多い。また、メインエントランスや、ロゼッタストーンなどの有名な展示物のまわりなど、人が多く行きかう場所であった。

それに対して、「控え目な照明」、「静かな場所」のマークがセットで表示されていることも多い。これらは、例えば、絵画・仏像等の展示のため照明を落としている箇所、また観覧者もゆったりと鑑賞している場所であることが多い。また、数は多くないが、組み合わせとして、「にぎやかである」「混雑」「控え目な照明」といった場合もある。例えば、それはミイラの展示など、その博物館のメインの展示の一つであり、多くの人が行きかい、会話が飛び交っているため、にぎやかであるが、展示物の性質上、暗くする必要がある場所である。通路は、「混雑している」のみの表示になっている箇所も多い。

このように、①～⑥の一つだけ当てはまる場所もあれば、場所によって、複数のセンサリーが組み合わさって表示されている場合もある。必ずしもその組み合わせが一致するわけではないため、センサリーマップを作成する際には、展示物および展示室を一つ一つ確認しながら、どの項目に当てはまるのかと検証する必要がある。

また、これらは、大英博物館ならではの特徴であり、他の博物館センサリーマップを作成する場合は、違う項目が必要である場合もあるし、組み合わせが変わってくることもあるだろう。その博物館の特徴に合わせたセンサリーマップを、複数の職員・関係者が、実地調査を行いながら作る必要があることを感じた。

【4】他館の状況、その他共通事項

(1) 他館の状況

インクルーシブの取り組みとして、特記事項としては、フランス・シテ科学産業博物館の各種取組とイギリス大英博物館の実地調査を取り上げたが、以下に他館の状況もあわせて記載する。

① パリ国立自然史博物館—進化大陳列館・人類博物館

国立自然史博物館では、おもに、進化大陳列館、比較解剖学・古生物学陳列館、人類博物館を見学した。フランスでも、イギリスでもキャッシュレス化・オンライン化が進んでおり、パリ国立自然史博物館も同様であった。チケットは、すべてオンラインで事前購入のため、現地窓口で購入する手段はない。どこにいても事前予約・購入できるため、便利であり、人件費を節約できる反面、母語でない来館者や、カード決済の手段がない来館者にとっての利便性は考慮した際、窓口対応、支払手段の多様性について、現在の日本の状況にすべて当てはめることは難しいと感じる。

古生物学陳列館は、昔ながらの展示室であるため、エレベーターの設置はなく、階段を使用するしかなかった。構造上、やむを得ないことであり、こういった博物館において、ハード面でのインクルーシブ対応を取り入れることは、簡単なことではない。

一方、進化大陳列館は、外観は昔ながらのものであるが、建物の中は、吹き抜けになっており、エレベーターが完備され、ベビーカー、車いすが通るための十分な幅は確保されている。館内の掲示物については、母語であるフランス語がメインであるものの、展示情報端末については、3か国語対応となっていた。吹き抜けで、来館者の声が互いに届きやすく、開放的である。また、ガラス越しに展示が見られるため、他の来館者の動きを把握しやすい構造である。展示室を区分するのではなく、建物全体を広く使い、どこから見てもどの部分が混んでいるか、空いているのか見渡すことができる。

少し離れたところにある人類博物館においては、シテ科学産業博物館と同様に、館内マップの模型やハンズオン、音声、点字が一体化となった展示物があり、様々な来館者を想定した導線となっている。また、人類博物館ならではのものは、入口に、各国のあいさつが掲示されていることだ。物理的なバリアフリーではないが、どの来館者も自国のことばを探し、見つけてはその写真を撮っている。この挨拶の掲示があるだけでも、心理的な障壁が低くなることを感じた。

②ロンドン自然史博物館

パリ国立自然史と同様、ロンドン自然史博物館は、昔ながらの建物であるため、ハード面は取り組みにくさを感じた。そのうえ、広大かつ入り組んだ展示室であるため、導線がわかりにくいという難点がある。それを解消するために、館内マップ(エントランスで£2で販売)において、わかりやく展示室を示す工夫をしている。ゾーンごとに色分け(赤・緑・青・オレンジ)を行い、館内にもとの色のゾーンに行くには、どの通路を行けばよいのか掲示している。そのほか、チケットデスク・ミュージアムショップにて、セルフガイドツアー用の「スーベニアガイド」を用意している。

(2)多言語表記・館内ガイドのあり方

多言語表記は、フランスにおいては、自国語、英語、近隣の国と3パターンであることが多い。イギリスにおいては、英語のみである博物館がほとんどである印象を受けた。

館内ガイドも、母語、英語、スペイン語等、その他数か国というパターンが多かった。スマートフォンの普及により、来館者自身の端末を使用し、翻訳している場面が、よく見受けられたため、以前より言語数はどの国も縮小傾向にあるように思える。展示そのものの情報についても、スマートフォンでコードを読みとり、詳細情報を得るしくみも増えている。館内の展示情報端末のうち、備え付けのものがそこまで多い印象はないが、子ども向けの展示情報等は、ゲームなどの機能もふくめ、備え付けの端末にて操作するものが多いように思われる。

また、紙の館内ガイドは、ほとんどの館において、有料である。WEBでも入手することができるため、印刷物については、日本円にして数百円にて販売している。

(3)全体を通した共通事項

インクルーシブ対応といっても、その博物館の状況は様々であり、館によって、できることとそうでないことを取捨選択していると思われる。

①造作物が多い展示、比較的新しい建物、広大な敷地がある場合は、博物館のハード面そのものに、インクルーシブが観点を取り入れやすい傾向がある。

②昔ながらの建物構造である博物館、標本そのものが多い博物館は、改修を行うことも難しい。よって、ソフト面で対応をメインとするのが効果的な場合があるように感じる。(センサリーマップなど)

③無償で来館者が利用できるものが多いが、有償のものも工夫をしている。館内ガイドを有償化したり、入館料の代わりに、ドネーションのしくみを充実させたりしている。

上記だけでなく、他の視点もあると思われるし、また上記を組み合わせでできることもある。大切なことは、自身の博物館内外における資源・状況を分析し、少しずつあらゆる角度からインクルーシブ対応を進めていくことである

と感じた。すべてについて対応ができるわけではないが、それぞれの博物館の特色を活かし、その館の事情にあったインクルーシブの取り組み方を検討し、できることから対応すること、対応し続けることが重要であると考え

4. 成果及び結果（実施した研修の成果や感想、特記事項等を具体的に記述して下さい。）

今回のインクルーシブ対応事例の調査の中で、各博物館において、インタビューや実施調査等を行ったことで、特に次の点について学んだ。

(1) ハード面・ソフト面での取り組みの違い

館の特性によって、ハード面でできること、ソフト面でできることが異なる。特に、国立科学博物館は、重要文化財である日本館と、別棟である地球館の状況は異なる。また標本・資料が多いため、造作物は少なくなる傾向がある。よって、すべてシテ科学産業博物館のようにできるわけでもなく、または大英博物館のようにできるわけでもない。他館の取り組みを参考にしながら、ハード面、ソフト面の両面から、当館に合った取り組みを常に模索していくしかない。

(2) 「特化すること」と「一緒にすること」

インクルーシブを検討する際に、必ず来館者の特性に注目し、特化した対応策を考えることは重要である。それを行わない限り、各々の来館者の不便さは解決されないからである。しかし、それを展示室に取り入れるときは、「特化したもの」を統合し、「一緒に」にすること、一緒にの空間で、すべての人が過ごすことができるという視点を持つことが重要である。時によって、来館者別に、対応を分けざるを得ないものもあれば、同時に行うこと・使用できるものもある。さまざまな来館者の特性・心配事にフォーカスしつつも、一緒にの空間で解決策を図ることが、だれもが楽しむことができる博物館を目指す具体的な方法であると思った。

また、「一緒に」という観点は、来館者同士だけでなく、来館者－博物館職員間同士でも言えることであり、展示室・展示物の使い方をシンプルに、誰もがわかりやすくするということも考えられる。「特定」の人が使用できるわけではなく、すべての人が自然に、一緒に使用できる・使用しやすいという視点を忘れないようにしたい。

5. 今後の課題等（今後の活動の広がり・深まりのための展望や問題点等を具体的に記述して下さい。）

(1) 課題の整理

ひとえにインクルーシブ対応といっても、その方法は様々であり、各博物館が抱えている事情に応じて、個別に対応せざるを得ないということがわかった。展示室そのものに取り入れられることとそうでないこと、またハード面でできることとソフト面でできること、すぐに着手できることと数年単位での検討が必要であること、など、課題の整理が必要である。

(2) 博物館内での役割分担

海外の博物館は、研究者のほかに博物館の各分野のスペシャリストが在籍しているところが多い。今回訪れたシテ科学産業博物館でも、インクルーシブ対応のスペシャリストが10人程度のチームを組んで、じっくりと時間をかけて対応しているし、ロンドンの博物館でも研究員とは別に博物館の学芸員が在籍していることを伺った。日本の博物館よりも、博物館での従事人数は、明らかに多い。

現状、日本において、海外と同様の対応を行うことは、困難であるものの、博物館内での各部署と連携しながら、あらゆる角度からインクルーシブ対応の課題を抽出し、計画を作成することが必要である。

(3) 継続的な取り組み

インクルーシブ対応は、一回やれば良いというものではなく、継続的に行っていくこと、また時代に沿った対応を考えていくことが必要である。

(4) 予算の継続的な確保

(2)、(3)の計画を実行するためには、予算の確保が必要である。

上記(1)～(4)については、当館内で検討することも、重要であるが、当館だけでなく、他館との情報共有を行い、各博物館が連携して対応していくことも重要であると考えている。各館それぞれの長所をいかし、短所を補い合うことで、博物館全体としてインクルージョンを考えていくことで、「誰もが楽しむことができる」場所が増えていくのではないかと思う。